2023.1.1　南海日新聞

地域に若い世代必要

キャンプまだ伸びしろある

田上至さん　長島高校卒。ガソリンスタンド勤務を経て、1993年に自然保護団体「海山メダカの会」を発足。紀北町合併の2006年にNPO法人ふるさと企画舎を設立し、指定管理者制度で町営キャンプイン海山を運営。昨年は「シー・トゥー・サミット三重紀北大会」の実行委員長を務め、銚子川の環境保全に力を注ぐ。紀北町船津。

―コロナ禍のアウトドアブームで全国各地のキャンプ施設に人が押し寄せたと報道されていたが、実際はどうだったのか。

田上　キャンプブームの勢いも少し陰りが見えてきて、新型コロナの感染拡大前がピークだった。全国的にキャンプブームは続いているが、キャンプイン海山は団体客の制限などで感染症対策を厳しくしたため、集客は伸びていない。

―NPO法人はどういう思いで設立したのか。

田上　自分を育ててくれた地域、自然への感謝と自然保護の気持ちで1993年に海山メダカの会を発足し、98年にオープンしたキャンプイン海山で遊びの達人としてソフト面でサポートを始めた。メダカの会の活動でまちづくりに関心が強くなり、キャンプイン海山が指定管理者制度に移行したのと、集客交流で活性化の拠点になると考えて2006年にNPO法人を設立した。

―地域活性化の取り組みは。

田上　若い世代を増やすことが一番重要となる。これまでは「関係人口や交流人口を増やし、何度も訪れてもらうちに、地域に住み着く人がいれば」と思っていたが、そんな悠長なことを言っている場合ではなくなってきた。学校がなくなり、子どもの数が一気に減っている。

今、都会ではコロナやウクライナ戦争、うつ、いじめ、自殺など子どもが元気に育っていない焦りから、自然豊かな所で遊ばせたいという子育て世代が増えている。子どもはアウトドアを楽しんだことがあるかどうかで将来の力が変わってくる。

キャンプイン海山に来る人たちはキャンプを通じてたくましい子どもを育てている。ふるさとのない都会の人からは「ここが僕のふるさと」という声も聞こえる。若者が住み着くためのネックは仕事だが、今は田舎でもインターネットを使って仕事ができる。

「お金じゃなく、子どもたちのことを考えたい」という人が多くなれば田舎にも光が差し込む。キャンプイン海山はコテージで無線LAN「Wi-Fi（ワイファイ）」が利用でき、「親子ワーケーション」のイベントも企画している。完全移住は難しいが週末だけの利用や2拠点居住でもよい。誰かが突破口を開いてくれれば若者が集まると期待している。

―コロナ後に向けた新たなビジネスや展望は。

田上　これまでイベントを軒並み中止してきたが、国は野外ならマスクなしで大丈夫との方針でキャンプには応援などのイベントをつなげたり、ソロキャンプや子育て家族企画し、来年20周年を迎える熊野古道客のまだまだ伸びしろがある。コロナの様子を見宿泊提供も考えていながらキャンプと防災る。

熊野古道は観光の柱

広域で将来の議論を

―地域の魅力はどこにあるのだろうか。

田上　人々は想像を絶する自然に魅力を感じる。手軽で身近な自然が紀伊半島にある。「シー・トゥー・サミット三重紀北大会」の実行委員長として感じたことは「参加者は市町名に関係なく紀伊半島のきれいな川や海がある」と捉えている。そのためにも三重、和歌山、奈良の3県が連携して紀伊半島の大きなスケールをPRすべきだ。

―熊野古道はどう生かすべきか。

田上　紀北町の将来を考えると観光業が柱の一つとなり、せっかくの世界遺産だからいかに集客するかが課題となる。そのためにはこの地域が「観光地」との意識を持つことが重要。先日、（和歌山県の）中辺路に行ったが、山しかない地域なのにしっかりとした観光地となっており、古道客の多さにも驚いた。

―伊勢路と中辺路の違いはどこにあるのか。

田上　中辺路の語り部と話した際、「伊勢路は交通手段の面から安心して歩くことができない」と指摘された。ただ、一般庶民が伊勢神宮から熊野三山を目指した伊勢路と、京都や奈良から権力者が歩いた中辺路とでは本質が違っている。

和歌山のまねをしたり中辺路の客を伊勢路に呼び込むのではなく、しっかりと伊勢路の魅力を伝えることが大事。伊勢路は石畳だけでなく、途中の町並みも含めた「生活の道」としての魅力がある。三重県は伊勢神宮の人気に甘えて情報発信が弱い。

―少子高齢化や過疎化、地場産業衰退にどう対応すべきか。

田上　町民一人一人が危機感を持って真剣に考えれば将来像が見えてくる。前向きにチャレンジすることも大事で、当事者が楽しまなければ、来てくれた人は楽しめない。

―移住定住や地域活性化にはどんな取り組みが必要か。

田上　昔のように県や市町村をまたいで人材を集めてほしい。広域で親交が深まればアイデアも出てくる。みんなで地域の将来を真剣に話し合い、観光や林業、ボランティアなど行政目線でない人たちのアイデアも取り入れてほしい。

―行政はどうあるべきか。

田上　住民目線がキーワード。行政と住民が話し合う機会が少なく、（紀伊長島と海山の）合併後は縮こまっているようにも感じる。職員はまちなかを歩いて住民の生の声を聴いてほしい。そういった普段の付き合いの中から良いものが生まれる。

職員は観光視察ではなく、一人の観光客としてもっと観光地に出向いてもらいたい。視察だといいところしか見えないが、観光客にはその地域の人たちの努力が分かり、学ぶべきものが見えてくる。